令和３年度「オリンピック・パラリンピック・ムーブメント全国展開事業」

事業実施報告書

Ⅰ　スポーツ及びオリンピック、パラリンピックの意義や歴史に関する学び
Ⅱ　マナーとおもてなしの心を備えたボランティアの育成
Ⅲ　スポーツを通じたインクルーシブな社会（共生社会）の構築
Ⅳ　日本の伝統、郷土の文化や世界の文化の理解、多様性を尊重する態度の育成
Ⅴ　スポーツに対する興味・関心の向上、スポーツを楽しむ心の育成

道府県・政令市名【　　島根県　　】

学校名【　　島根県立益田高等学校　　】

１実践テーマ	Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ（複数選択可）
２実施対象者 （学年・人数）	第1学年　135名　　第2学年　133名
３展開の形式	（１）学校における活動 ①教科名（　保健体育　） ②行事名（　体育祭　　） ③その他（　　） （２）地域における活動 ①イベント名（　　） ②その他　（　　）
４　目　標 （ねらい）	○障がい者スポーツに対する理解を深め、共生の大切さを学び、自らの生き方を考える機会とする。 ○すべての人がスポーツを楽しむための関わり方を考える機会とする。
５　取組内容	○体育理論による、スポーツの多様性と共生社会についての学習 １年生を対象に学習し、東京２０２０大会で実施される競技を、ピクトグラムを用いて紹介し関心を高めた。また、走り幅跳びを例に、パラリンピックの世界記録がオリンピックの世界記録と比べて変わらないことを紹介し、パラリンピック選手がオリンピックに出場することの是非について議論した。また、多様な性をめぐる競技への参加資格について考え、性別の枠組みの必要性について議論した。 ○パラリンピック競技選手団事前キャンプに対するボランティア活動 東京パラリンピックアイルランド競技選手が益田市で事前キャンプを実施することになり、益田市がその受け入れ準備を行う際のボランティア活動に参加した。 歓迎ムードを盛り上げるために、駅前の道路沿いにアイルランド応援のぼりを設置したり、事前キャンプ場所の準備として、ホテルから食堂、トレーニン

グ場への移動を誘導する案内板の設置を行った。また、トレーニング場には地元の小学生が作成した応援はがきを飾り付ける作業を行った。

〇体育祭でパラリンピック種目をアレンジした競技の実施

　体育祭を企画・運営する生徒会が、パラリンピックへの関心を高めるために、ブラインドサッカーを真似た競技を考案し体育祭の競技として実施した。アイマスクをつけた選手とガイド役の選手が一緒になってボールをドリブルして、リレー形式で争う競技を行った。

〇オリンピック・パラリンピック関連図書の紹介

　オリンピック・パラリンピックの歴史や意義、スポーツの在り方などの図書を生徒に紹介した。特に、共生の観点で書かれた図書を選定し、司書と連携して図書館内に紹介スペースを設置した。

〇三木拓也選手による講演会・実技体験

　車いすテニスの三木拓也選手を招き、パラリンピアンの生き方や考え方に触れ、生徒自身の個性を見つめなおす機会にすることをねらいとして開催した。講演会前には、本校のテニス部の生徒とラリーを行い、三木選手が車いすを機敏に操作しながらラケットでボールを打つプレーを目の当たりにし、車いすテニスの難しさや魅力を感じることができた。講演会では、夢を追いかけること

	の大切さや、「決断」と「行動」の積み重ねから個性が生まれてくることなどを、高校生の視点からわかりやすくお話をしていただいた。 〇ブラインドサッカーに関する講演会・実技体験 　ブラインドサッカーチームの代表を務める拝上　誠氏を招いて、障がい者スポーツに対する理解を深め、共生の大切さを学び、自らの生き方を考える機会にすることをねらいとして開催した。事前に、ブラインドサッカーのルールやプレーの様子を動画で視聴し、ブラインドサッカーのイメージと共生についての視点を学習して講演会に臨んだ。ブラインドサッカーの体験では、全ての生徒がアイマスクをつけボールを蹴る選手役をしたり、選手役に方向を指示するガイド役を体験した。講演会では、コミュニケーションの大切さや障がいも個性として受け止め、相手の立場に立って考え行動することの大切さをお話ししていただいた。
６　主な成果	〇東京２０２０大会の開催を機に、スポーツの世界大会を身近に感じることができ、それに向けて努力するアスリートの存在を感じることができた。日頃、スポーツに関心のない生徒も競技をテレビで見たりするなど、関心を持つ姿勢が見られた。また、スポーツを通して性の多様性や障がい者も生活しやすい社会の在り方などを学ぶきっかけになり、社会の課題に対して様々な視点で考える機会をつくることができた。 〇車いすテニスとブラインドサッカーの講演会を通して、スポーツは障がいを持っていても楽しむことができ、豊かな人生を送っていくうえで大切なものであることを改めて感じることができた。また、障がい者がスポーツを楽しむためには健常者のかかわりが大切であり、それはスポーツだけでなく日常生活においても同様で、共生社会を実現させていくためにコミュニケーションの大切さを考えることができた。 〇今回の学習で、共生の大切さを様々な機会で感じることができた。生徒の意識にも変化が見られ、体育の授業の中で男女が関わりをもちながら活動をすることが増え、お互いにスポーツを楽しむためにはどうしたらよいかを考える姿勢が現れてきた。

７実践において工夫した点（事業の特色）	○どの活動においてもねらいを明確にし、生徒にもねらいを意識した活動にするように働きかけた。また、ねらいの中に共生の大切さの視点を持たせるように工夫した。 ○今回の学習で学んだ共生の大切さの理解を生徒の行動に反映させるために、体育などで様々な仲間と関わる際に、相手の立場に立って考えることや関わり方について考える機会をつくり指導を行った。
８主な課題等	○ブラインドサッカーの講演会・実技体験では、４５分の時間設定となり活動時間が短く、実技でブラインドサッカーの動きのある活動を行う時間を確保することができなかった。 ○オリンピック・パラリンピック関連図書の紹介を行ったが、生徒に対して具体的な活動を行わなかったため、生徒の興味関心を高めることができなかった。司書との連携をより深め、積極的な活動を行っていく必要があった。
９来年度以降の実施予定	○オリンピック・パラリンピック関連図書を課題探究など生徒の学習の教材として活用していきたい。 ○体育祭のパラリンピック種目の導入は、今回の実施で好評であったため、来年度も導入に向けて検討していきたい。